

シェアリングを重視した大学キャンプ実習が 信頼感と自己開示性に及ぼす影響

関 佳那子 (京都教育大学大学院)

1. 目的

本研究の目的は、シェアリングを重視した大学キャンプ実習が参加者の信頼感と自己開示性に及ぼす影響を明らかにし、実際に「シェアリング」活動で発言された参加者の発言内容とその変容がどのように影響するのかも合わせて検討することとした。

2. 研究方法

「信頼感尺度」、「自己開示行動自己評価尺度」を用い、キャンプ実習参加経験が参加者に及ぼす影響を検討した。またキャンプ期間中(2日目-4日目)は就寝前に各グループでシェアリング(ふりかえり)活動を計3回実施し、1回の時間は90分程度とした。

1) 対象者：2019年9月2日～6日の4泊5日で行われたキャンプ実習に参加した大学生(50名)

2) 分析方法：上記の2つの検査をキャンプ実習参加前・直後・1ヶ月後の計3回実施した。シェアリング活動で実際に発言された参加者の発言をボイスレコーダーで録音し、得られた音声データから発言の分類を整理し、「ふりかえり発言チェックリスト」を作成した。各グループの記録からチェック項目をカウントし、発言カテゴリ別の発言時間(秒)と発言割合(%)を算出した。得られたデータは、IBM SPSS Statistics27を用い、相関係数や分散分析、多重比較、t検定を統計処理を用いた。

3. 結果と考察

1) 信頼感と自己開示性の変化

キャンプ実習を経験することで参加者全体の信頼感が向上し、キャンプ1ヶ月後まで維持され、特に「他人への信頼」因子において顕著な影響があることが明らかとなり、元々信頼感の低かった者において影響が大きいことが示された。自己開示性においては、参加者全体の有意な変化は認められなかったが、キャンプ参加前に自己開示が低かった者はキャンプ直後に得点の向上が見られ、その向上はキャンプ1ヶ月後まで維持されることが明らかとなった。

2) シェアリングの変化

シェアリングの発言合計時間(秒)はキャンプの日数を追うにつれて増加することが明らかとなった。

発言内容の全体的傾向として、キャンプ前半には個人や班を振り返り、上手くいったことや上手くいかなかったことについて発言する「肯定的評価」・「否定的評価」因子や、それらの反省を改善するための「改善・提案」因子等の発言時間が多いことが明らかとなった。キャンプ後半には自分自身をさらけ出す発言を示す「自分自身」因子や「日常転化」因子である自分の今後に向けての発言や将来に関する発言内容に変化していく傾向にあることが示された。

3) 自己開示性とシェアリングの関連

自己開示性がキャンプ直後にかけて向上した者において、3日目にかけて発言合計時間(秒)が顕著に増加し、4日目にもその増加を維持していた。発言内容においては、特に「肯定的評価」因子と自分自身を表す「自分自身」因子において発言が増加した。また自己開示性の質問項目別の変化では、キャンプ参加直後に自分の内面を他者に話すこと、悩みを相談することへの抵抗感が減少し、他人のこともっと知りたい、悩みを聞いてあげたいというコミュニケーションの話す側と聞く側の両面における積極的な変化が示された。さらに自己開示性が向上した16名の感想レポートの内容には夜の「シェアリング」活動に関する肯定的な記述が多くみられ、この活動の影響を強く受けていたと考えられる。

4. 結論

キャンプ実習参加経験が参加者全体の信頼感と元々自己開示性が低い者の向上に影響し、いずれもキャンプ1ヶ月後までその効果を維持することが明らかとなった。また、シェアリングにおける参加者の発言との関連から、自己開示性が向上した者の多くは、「シェアリング」活動の実施による影響を受けていたことが示され、シェアリングを重視した大学キャンプ実習の治療的效果を示唆するものとなった。